

# 講演会「里山を守る力」

## ～GMT65 そして「俺の米」プロジェクト

講師/富沢 崇さん (NPO 法人手賀沼トラスト事務局長)

手賀沼トラストの事務局を担当している富沢です。今日は「里山を守る力～GMT65 そして『俺の米』プロジェクト」と題してお話します。今手賀沼トラストでは組織をあげて根戸新田近くの里山保全、なかんずく遊休の田んぼをどうするかを検討をしています。検討結果がまだ出ていないので、今日の報告は私個人の考えや思いが入っているということをご承知おき下さい。

まず、NPO 法人手賀沼トラストについて紹介させていただきます。平成 11 年に発足、農民画家としても知られた日暮朝納さんが、所有する根戸城跡を中心とする根戸新田地区の環境保全、里山保全を謳い、市民と語らって立ち上げました。平成 23 年に NPO 法人になり、今年で 16 年目を迎え、会員は 140 人強です。地図の赤い所が手賀沼トラストの場所で、手賀沼の西のはずれ、北柏駅から 15 分位の位置にあります。根戸城跡の下に日暮さんの持家があり、ここをお借りし根城にし、周りに私たちの活動のフィールドが広がっています。日暮さんは残念ながら亡くなられ、今は農学博士の遠藤織太郎理事長の指導の下で活動しています。



活動内容はまず「里山の樹林地の保全」。根戸城跡を中心とする森を間伐し、ミカン山で果樹を栽培しています。「遊休農地を再生して作物を作る」として、「冬水田んぼ」をやっています。完全無農薬、完全無化学肥料で雑草と闘いながらお米を作り、今年も餅米とうるち米、古代米の黒米、赤米の 4 種類のお米を収穫したところです。ソバも作り、今すくすく育っています。「遊休農地を美しい花園に変える」としては、市から補助を貰い、ひまわりなど景観作物の栽培もやっています。今年「ひまわり迷路」をやり、沢山の市民の皆さんに来ていただき非常に好評でした。

また、「里山農教室を開講」し、80 名位が無農薬、無化学肥料での耕作の仕方を教わり、いろいろな作物を作っています。

里山農教室の派生物として一種のクラブ活動（部会）も続々生まれ好評です。竹細工教室、ハーブ栽培、ニホンミツバチ養蜂。養蜂では蜜やミツロウをとり、部員にお分けしています。ソバ打ち勉強会では、できたソバ粉を皆で打ち、挽き立て、打ち立ての新ソバを食べるイベントも催します。野菜ソムリエを養成する野菜ソムリエ部会もあります。

### ●里山の樹林地を保全する

根戸城址の森を間伐・整備、ミカン山でさまざまな果樹を栽培



### ●遊休農地を再生し、作物を作る

冬水田圃の田植え

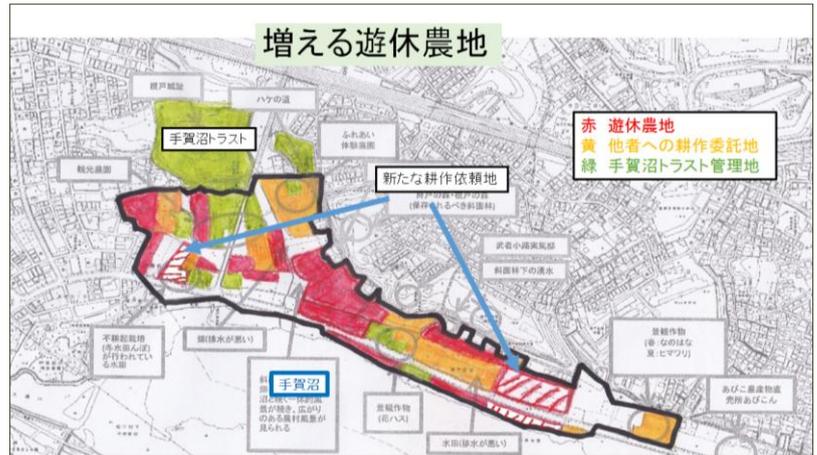


ソバ畑の収穫



## 爆発的に増えている遊休農地をどうするか

実は今、我孫子の根戸新田周辺には遊休農地が爆発的に増えています。図の赤い所は地元の農家の方々が、先祖代々の田んぼや畑だから雑草だけは生やすまいと頑張り、トラクターで耕している所です。一見農地のようですが、何も栽培されていません。草が生えてきたら耕すことを繰り返している土地で、非常にたくさんあります。黄色は農家の人が持ち切れず他の人に貸したり、市民農園のような形で開放したりしている所。緑色は私達が何かの形で管理している所。このわずかな白い所が地元農家の方が生産し出荷している所です。「新たな耕作依頼地」は、今年トラストで作って貰えないかという依頼が来て、合わせて12反、1.2ヘクタールあり、こうした田畑も保全しています。里山は水、田畑、森、山などが一体となった自然景観ですから、田畑が荒れていくのは見逃せず、容易ならぬ事態です。里山保全を謳う以上、何とかしなければ格好がつかず、一体どうしたらいいだろうかということです。



根戸新田地区には特別な事情があります。平成25年3月、我孫子市手賀沼沿い農地活用計画が策定され、ここに根戸新田地区に対する市の見解が述べられています。「①農用地としての厳しい規制がかかっている、②農地としては極めて劣悪で、生産性が非常に低く、当然後継者も不足している、③保全は市民の手で」という3点です。農用地としての厳しい規制というのは、国営手賀沼干拓土地改良事業の受益地ということです。国が中心になって干拓事業をやった受益地であるから、農地から変えてはいけないということです。数年前に市が地権者の意向を受け、農用地解除を県に申請しましたが、却下されました。それ以外にも規制が二重三重にかかっている、ここは農地としてしか使えないのです。けれども、農業では到底生活できません。市の分析では「区画整理、排水施設、農道等の整備が行われておらず、生産性が悪く、販売作物の栽培も困難」、こんな所を農地として保全しろと言う。規制がかかっている為で市が悪いものではありません。この地区の地主の多くは60歳以上の高齢者で後継者もいません。当然、遊休農地化します。先祖代々の田畑を雑草だらけにしない為に必死に努力しているのです。

## 保全する市民って誰？そこで GMT65 の出番

市は「保全は市民の手で」という方針を打ち出しています。「この地区の農地は手賀沼の水辺や後背斜面林などと共に良好な自然環境を形成していることから、引き続き保全・活用が図られる必要がある」、そして、「この景観や自然が農家の営農により維持されていることを理解すると共に、現在の厳しい営農環境を理解して市民が積極的に保全に関わっていくことが求められている」と。市民よ、お前たちはいい眺めだと言っているが、これは農家が頑張って守っているのだから、そこをちゃんと理解しなさいということですね。なかなか耳の痛い話です。

さらに、「援農ボランティアをはじめ多様な市民活動の支援による耕作の継続、耕作放棄地の管理など、市民が直接営農に関わる必要となってくる」と言っています。私が先程根本市長に「どうして野田市はそんなに農地が買えるのか」とお尋ねしたのも、このことがあったからです。市が買ってあげればいいじゃないかとも思いますが、我孫子市には野田市のような基金もなく、市に金を出せということも到底できない現状です。「市民が保全に関われ」というのは、私は当然だ

と思います。反論もあるでしょう。市民にやれというならもっと物資を出せという方もいるでしょうが、市が出すのは税金であり、結局我々が金を出すのですから、市民にやれという指摘は当然だし、市の分析も非常にまっとうです。我孫子市は一生懸命やっていると私は思います。ただ、根戸新田地区の里山を守る市民とは誰なのということです。我孫子市の住民？自然保護という大義を背負ったシチズンという意味の偉そうな市民？この里山の日常的な受益者は誰かと考えてみると、答えが出るとと思います。日常的な受益者—私のイメージは、里山やふれあい通りの歩道を散歩しているこの私、毎日夕焼けを眺めながら、ピンク色からだんだん暮れなずんで赤く変わっていく夕日を見て、ああ、いい風景だなあと思っている私、直接の受益者たる私。これこそが里山を守る主体なのではないかと考え、もしかしたら根戸新田地区の里山が守れるかもしれないと思うんです。

根本市長のように国まで動かすような力は、私たちにはありません。ですから「極々小さい所、せめてこの根戸新田だけでも命に代えても守ってみせるぞ！」と言うと大げさですが、真実は細部に宿る、細部にこそ力があるという事を見せたいという気持ちです。思いついたスローガンが単なる市民でではなく GMT、どこかで見たことのあるスローガンでしょう、あの連載テレビ小説『あまちゃん』に出てきた地元民です。地元民はちょっと響きが田舎くさいので GMT。里山風景の受益者である GMT こそが、里山を守っていく力にならなければならないのではないかと思います。

私がこれを考えついた一つのきっかけは、船戸の森の会でした。船戸の森は、正確には根戸船戸緑地といって根戸新田地区北側の斜面林の一画です。県有地と市有地から成る森で、一応緑地とされていたものの、手入れされず鬱蒼とした薄暗い森でした。見通しも悪く、下草も刈ってありませんでした。5 年位前に我孫子四小の学校評議員の皆さんが中心となり会が立ち上り、会員が月に数回集まり、掃除や間伐を始めました。みるみるきれいに明るくなり、子どもたちの歓声が聞こえ近所の人たちの散歩コースとなり、森は見事に我々地元民の憩いの場になりました。会の構成員は船戸の森のすぐ近くに住んでいる方々で年齢はほぼ 65 歳以上、80 歳を超える方もいます。つまり、GMT65 プロジェクトです。地元の住民で根戸新田地区が散歩コースの人達。こういう人たちがまさに地元住民で里山を守っていく主体である。現役の人たちは仕事が忙しい。65 歳以上の私たちがこれを担わなければならない。GMT65 こそが里山を守る当事者だろうと考えると里山を守っていく主体が、単に市民という漠然とした概念ではなくはっきりしてくると思います。

### 我孫子市は本気 補助金も出る

市は本気、やる気です。今年 4 月に農用地等活用事業補助金制度という新たな補助金制度を立ち上げました。10a (1 反)あたり、景観作物(ヒマワリ等)を植えたりすると、年に最大 12 万円の補助金を出すというものです。米は今 1 俵 9000 円、8 俵とれても 7

#### ●遊休農地を美しい花園に変える ヒマワリ迷路や花蓮池



万 2000 円にしかありません。ガソリン代やら労賃やら色々で経費は 10 万円以上かかり、入る金は 7 万円。それに比べると、景観作物に 12 万円とは破格に有利な条件です。市は補助金を出すことで、何とかあの地域を荒れ果てた遊休農地から救おうと考えているわけです。田んぼで稲を作ると、米を売って金が入るからそれを当てなさいというので、田んぼを借りる費用として 10a あたり 2 万円しか出ません。景観作物をつくれれば 10 反で 120 万円。これなら、手賀沼トラストが引き受けても、最悪、足が出ることはないと思われまます。

一方、花だけ植えていていいのだろうかと思います。そこは田んぼであり、農家の方たちが営々

とお米を作ってきた。農耕民族の末裔たる我々としては、ここは一肌脱いで米を作らないと駄目だろうと思うんです。花だけでなく米を作りたい。これは私の個人的な見解です。手賀沼トラストの中でも割れています。そんなこと言ったって、米作るのは大変だよという意見です。

自給農園という考え方があります。我孫子の北新田、利根川べりで玉根さんという人が「むそう塾」という有機農法の塾を開いています。彼から学びました。国は、食料自給率の向上、海外農産物対策、食の安全と言っているが、この3拍子揃ったものが自給農園ではないかと。狭い分断化された田んぼで作っても元がとれないから、お百姓さんは狭い土地では作りません。政府は今、田んぼの大規模化を進めています。その狭い土地を私たちが活用すれば、食料自給率は上がります。

海外農産物対策に関して、彼は面白いことを言っています。自分でキュウリを作ったら、曲がっていても虫が食っていても食べるでしょう。自給するとその曲がったキュウリが1本100円位につくこともある。スーパーに行けば1本30円で売っている。だけど、自分で作ったものは食べる。これこそが海外農産物対策になるのではないかと。食の安全性は言うまでもなく、自分で作るものですから、農薬をバンバンかけるはずがありません。

私たちは花園も作りますが、お米も作る。それは「俺の米」、ここがポイントです。少々出来が悪くても、カメムシに食われて黒くても、俺はそれを食う。GMT65が「俺の米」を作るんです。

### 「俺の米」をつくり、俺が食う ふるさとはなくても地元ができる

但し、いくつか問題があります。第一に、「俺の米」の参加者だけでは作った米の全量を消費できません。今、10反余りの田んぼを作れと言われていますが、10反でうまく作れば80俵の米がとれます。例えば参加者が20人だとすると、1人当たり4俵の米が配分されます。米の年間消費量は大体1人1俵(60キロ)です。65歳以上ですから1世帯2人として、消費できるのは年間2俵です。余った2俵をどうするか。農協に売ると1俵9000円、1俵を作る経費2万円の半分もまかなえません。結果自分の家で食べる分の米はすごく高く1キロ500~600円になってしまいます。俺の米だからそれでもいいんですが、それならうちで寝ていて、魚沼産コシヒカリを食べていた方がいいということになりかねません。

できれば皆さんに「俺の米」を作る側になっていただきたいが、それが無理な場合にはサポーターになり、私たちが作った米を買い支えていただきたいんです。1キロ300~350円で買っていたことを考えています。GMT米というブランド米、あまりいい名前じゃありませんね。野田からコウノトリに飛んできてもらい、「コウノトリ踏んじった米」でもいいです(笑)。こういう形で皆さんに米を買い支えていただくと、とたんに根戸新田地区の田んぼは「俺の田んぼ」になります。直接参加している人は勿論、買っていただく人も、「俺はこの米を食っているんだ」ということになります。サポーターの皆さんには田植えや稲刈り等のイベントに参加していただきますから、土地を媒介にした新しい地域のつながり、コミュニティが形成される可能性もあると思うのです。

私は埼玉県で生まれ、殆ど東京の北区で過ごし、ふる里がありません。殆どの方はふる里と言える土地を持っていないのではないかと、我々や子ども、孫たちは故郷喪失者、根無し草です。でも地元は今住んでいる場所です。私が住んでいる我孫子市根戸新田という地元を通じて、周りの人たち

#### ●里山農教室を開講し、有機生態系農業をひろめる 80人の受講生が有機無農薬での農業を学習中



理事長の講義



実習風景

と協働し結集していくという運動がもしできるなら、GMTはふる里と同じ位の重みをもつ概念なのではないか、『あまちゃん』のGMTを見てそんな事を思いました。そこで宣伝させていただきます。メルマガ会員大募集。メールをお使いの方はぜひ、手賀沼トラスト宛にメールを送って下さい。色々なご案内を差し上げます。「俺の米」をやってもいいという方は、どうぞお申し出下さい。

### 千葉エコよりもっとエコ 機械は農家に借りて

第二に完全無農薬は本当に難しいということです。先ほど市長にも言われ、気が楽になりました。私たちのボスの遠藤先生は無農薬無化学肥料による稲作りの権威で、私たちの冬水田んぼでは完全無農薬無化学肥料です。全部有機肥料です。草取りは全部手でやっています。完全無農薬で難しいのは、私たちの見解では除草です。除草剤を使わないと草取りが必要です。完全無農薬無化学肥料に向けた研究を続けつつも、除草剤だけは当面使わざるを得ないかなと思っています。千葉エコ認証では慣行栽培 14 成分の半分の 7 成分で認証がとれます。私たちは除草剤だけで作ろうと思っているので、成分は2つか3つで済み、基準をはるかに下回る「超減農薬」となり、これで作ろうと思っています。

第三は、機械を持っていないことですが、これはかなり致命的です。農薬と機械を使えば、米作りはかなり簡単です。極端に言えば、1人でも1町歩ならできるかも。しかし、この機械がやたら高い。機械がなかったら、今までお話したことは絵に描いた餅になってしまう。幸いなことに田んぼを止めても機械を持っている農家があり、お支払いして機械を借り、指導を受けながら、手賀沼トラストが触媒になり、農家とGMTが共に米を作ることが考えられるのではないかと思います。

最後に「こうなったらいいな」と少々甘ったるい夢物語みたいな文章を披露し終わりにします。

「俺は 65 歳（私はじつは 66 歳ですが）。友達に進められて『俺の米』プロジェクトに参加した。暑い日の作業は辛いし、けっこう高くつくけど、自分の手で作った安全な米を食べるのが何よりだ。東京にいる娘のところにも送ってやってるよ。自給菜園も始めた。20坪ほどの狭い菜園から食べきれないほどの野菜ができるんだ。隣近所に配ってるんだ。お年寄りからは喜ばれるよ。晴れた日には、北口のマンションにいる息子の家族を誘って、手賀沼の辺を散歩する。本当は息子なんかどうでもいい。孫の小太郎（小太郎って本当は私が買っている猫ですが）と歩きたいんだ。やわらかでじつとりと汗ばんだ孫の手を握るとき、まもなく俺の人生は終わるけど、終わらないものだってある、と思えるんだ。『ほら小太郎、これがジイジの作っている米だぞ。もう穂が出てるだろう。あれがお米になるんだよ』嫁が『またジイジの自慢話が始まった』という顔をしてるが、かまうもんか。これが『俺の米』だ」。ありがとうございました。

#### ●里山カルチャーを学ぶ

- ハーブ栽培部会
- 竹細工教室（写真）
- ソバ打ち勉強会
- 野菜ソムリエ部会
- 日本ミツバチ養蜂部会



#### ●質疑応答●

Q. 野田市のHさん：思い切ったお話に感激しております。70歳になりました。私も古希の時に『昔でいう還暦かな』と思いました。野田市では市民が12万人になった時、市民全員に苗木を配り、その作業を手伝ったのがスタートで、緑のふるさとづくり実行委員会に14年位ボランティアとして参加していますが、メンバーは殆ど変わらず、年齢が高くなっています。自分のやっていることで満足していて、このままだと危ないという思いがしますが、名案がありません。富沢さんのお話はたいへん壮大で、会員も140名位おられるということですが、わが方は会員100名で実際に活動に出てくる人は50名位です。機械を使う作業では、中期計画をもって人員確保などをやらないと

続かないのではないかと。そうなってほしくないという思いから、ご意見を聞かせてください。

**A. 富沢：**おっしゃる通りで、GMT65と言っているうち、私もすぐ70歳になっちゃうわけです。ただ、65歳、70歳はまだまだ仕事ができると思います。米作りは機械操作さえ慣れば力はいりません。安全に気をつければ、全て高齢者でもできる作業です。しかし、農業は土日だけではうまくいかず、平日に出てもらえるのはGMT65ということになります。若い方々をどう私たちの活動に引きつけていくか。メルマガ会員などに絶え間なく発信し、ちょっとでも関心をもって貰い、顔を出してできればお米を買って貰い、『私たちの田んぼ』という意識を持って貰う。それによりその方たちをGMT65予備軍にしていくことしかないのではないかと考えています。

**Q. 平岡：**この穂がお米になるとお孫さんに説明する場面が出ましたが、若い人たちにバックになっているお米しか知らないとか、魚も肉もスライスでしか知らない人がいることが、よくないことだと私は思います。トラストさんでお子さんたちに体験してもらうことはお考えではありませんか。

**A. 富沢：**実は既にやっています。今日の話は新たに出てくる遊休農地にどう対応するかという話ですが、冬水田んぼではもう十何年も完全無農薬で作っています。田植えの時には会員やマスコミを通じて、一般参加者に来ていただけてきます。流域フォーラムに援助いただいている「かかし祭り」については、ピラを我孫子の小学校に配っています。稲刈りのときにも参加していただけています。そういう方たちにはわずかですが、無農薬米をプレゼントしています。お孫さんが小学生とか幼稚園といった世代への一種の教育効果も十分考えながら、今後もイベント等もやっていきたいと思っています。

**Q. 平岡：**最後に根本市長に一つお尋ねします。自然の多い所で子育てしたいという人もいれば、自分の住む近くに立派な道ができ、ショッピングセンターができて嬉しいという人もいます。多くの人に『わかってもらうための仕組みづくり』についてはどのようにされていますか。

**A. 根本：**ものすごく難しいです。今、野田市では新長期構想づくりの審議会を聞いておりますが、三世代同居を普及させなさいという話が出てきました。その為には雇用の場が必要です。雇用の場がないと、三世代同居と言っても二世帯目が絶対に住んでくれない。ですから、私たちは優良な農地を残しながら、一方で若い世代がそこに住んでくれるにはどうしたらいいかということを考えていきたいと申しております。我孫子市は私たちから見ると、三世代同居の話ができる場所です。交通が便利で、ここからなら東京に通える。あとは地元でどれだけ魅力を作れるかによって可能にできます。しかし、野田市の場合、自然はたくさんあるが、東京からの通勤時間が長いということで雇用の場をどうするかをセットで考えなければならない。それに苦勞しているのが野田市の現状です。ですから、鉄道を引っ張る話をしたりして、『雇用の場があるよ』というところにつなげなければなりません。地域ごとにテーマが違うんですね。

**Q. 平岡：**三世代同居によって自然が守られるということですか？

**A. 根本：**いやそうではなくて、自然がいいから住んでくださいといっても、よそに行ってしまうのが、今言われている『人がいなくなる自治体が出てくる』ということだと思います。田舎暮らしがいいといっても、人は居つきませんが、自然がいいところで暮らしたい気持ちは絶対持っているはずで。飯が食えて自然が素晴らしい場所をどう作るかが、今一番難しい話じゃないかと思っています。野田市としては東京への時間距離を短くし、また、市内に多くの雇用の場を設けつつ、これだけ自然があるので、ここで子どもを育てていきませんか、ということに仕掛けようとしています。自然がいいですというだけではないんです。

**平岡：**手賀沼流域の景観や自然を守るという点でも、また、住みよい街を作っていくという点でも、大変参考になるお二方のお話だったと思います。どうもありがとうございました。